

有森信二

「婆ちゃんはやつぱり正しかった」と母は切り出した。少し気分が持ち直したらしく、ほぼ半日閉ざしていたままだった目を開き、ゆっくりと喉仏を上下させた。八度半ばだった熱が、七度まで下がった。蒼白だった頬のあたりに、少しだけ赤味がさしている。

付き添っていた叔母が帰り、今は私だけが傍にいる。面会終了時刻が迫ろうとしているので、私も腰を浮かしかけたところだった。

婆ちゃんとは、母の実の母だ。私は初孫だったのだが、優しい言葉を掛けてもらったという覚えはない。いつも、頑固で高飛車で、恐いだけの存在でしかなかった。

「最初が肝心。農家の跡取りとして厳しく教育せねばならぬ。小さいうちに、徹底的に叩き込むこと」と嫁ぐに際し母は、婆ちゃんから厳しく言い渡されたらしい。

母も婆ちゃんのことを「あの情け容赦もない人のところに、兄の嫁など来る訳がない」と言っていたほどだった。

婆ちゃんは養女として育てられる中、元々人一倍勝負気な性分であつたらしく、養母から指図されることを極端に嫌い、完璧なマニュアルである独自の「掟」を考案した。

られたり、可愛がられた覚えが一度もない。怒り飛ばすだけだ。泳ぎにも行かしてくれない。ラジオも与えてくれないと、いったい何千回言い募ったことだったか。

「長男には田畑を残すのだから、中学卒で十分だ。下に三人もいる。そこは、言わずともわかるだろう」

ということだったのが、どういう風の吹き回しになったのか、急に親族会議を開き、掟に従うことを条件に、高校まで出してやるということになった。であるから、「こんな忙しいときに、学校なんぞ」などと数々の口撃を受け、屈辱を甘受し、不本意ながら高校を卒業したのだった。

「逃げ出さないと、生きていけない。そうでもしないと、自分の方が何かをやらかしてしまうかも知れない」

と本気で思った。十数年に亘る農作業で、いつか腕力だけは、普通の大人に負けないほどになっていた。

高校で過ごす時間以外は農作業をしながら、密かに関西の国立大学を受験する計画を練っていた。高校もそれなりの成績であったし、なにより図書館で読んで感動した作家たちの経歴がその気にさせたのであつた。しかし、準備らしい準備もせずに受かるほど、大学は甘くなかった。

理由はともかく、外に出なければならぬ。外に出るには、自活するための仕事に就く必要があつた。就職の準備などしていないので、目の前にある公務員試験を受けた。

夜明け前に起きる。塵一つ残さない。近所の誰よりも、一番先に田畑に出る。一番に苗を植える。人に後ろ指を指させない。勉強はせずに一番を通す、という具合であつたから、自身には猛烈に厳しく、子にも孫にも同じように厳しかった。とにかく、「人に笑われるのが一番の恥だ」というところに全てが集約されていた。

多分、婆ちゃんの厳しさの洗礼を最初に受けたのは、長女である母であつたのだろう。大人でさえ大変な、牛を使う田起こしの作業を、小学生のときにやらされたという。

その母の長男である私は、母と婆ちゃんとの二人から、ことある毎に目玉が飛び出、肝が縮むほどに怒られた。長男の心得であるらしい「家を継がねばならない。親や弟妹の面倒を見ねばならない。仕事は誰よりもてきぱきとせねばならない。人に笑われてはいけない。勉強は一番でなければならぬ」という言葉の弾を、もの心付いたときからビシビシ撃ち込まれてきた。

季節の変わり目には決まって風邪で高熱を発し、ただでさえ心臓に雑音が混じるということで、小学校のラジオ体操も免除されていたのに、家の仕事は容赦なかった。

さらに、長男には外部の情報を与えない、本を読ませない、町に出さない、金を与えない、という掟も追加されていたから、私は毎晩母と大声でやり合ったものだ。

学校で習うことと家で言われることが反対だ。家で認め

家を出ることを宣言する際、「ここには住めない。こんな掟を押し付けることは、元々虚弱な自分には無理だ。弟妹たちにも、自由を与えなければ駄目だ」という類のことを母に強く言い残し、行方不明になる気が出たのだった。

「婆ちゃんの何が。どういう意味」私が尋ねると、母は「婆ちゃんの掟に従わず、高校に出したのが間違이었다。順番が狂うてしもうた」と喉仏を大きく上下させた。

定年後も戻らないと、私は予々告げていたが、それが現実になるうとする今、母の元に「四十年間も代理として住んできた」と言い始めた弟と、私の関係が怪しくなつた。

私には、常々言い通してきた手前、この理不尽な掟を残して置くことだけは避けねばならないという思いがある。「子供なりの夢がある。広い社会も知らねば通れない。適性などそつち除けて、長男だからとか、掟だからという一言で、家に都合良く縛り付けようとするのはおかしい」

母は乾いた唇の形で「何でまた、今の今になってから、なあ」との言葉を残し、邪険に背を向けてしまった。

婆ちゃんが、養母への憎悪と怨念から考案した掟に、第一の犠牲者である母と、第二の犠牲者である私が、今もなお縛り付けられているんだ、と私は母の背中に呟いた。